

パロソズ社會學の心理學的基礎(II)

南 博

パロソズが、『行爲の一般理論』で展開した、行動の心理學的な分析の出發點は、行動の原動力としての「動機づけ」*motivation*であった。動機づけの理論を體系化するために、パロソズが『一般理論』で協力を求めたのはトールマンとマレーの動機理論である本論文の(I)で述べたように、トールマンでは、欲求體系が、一次的(基本的)欲求と、二次的、三次的欲求から成るものとされるが、一次的欲求から、二次、三次の欲求が派生してくる、歴史的・社會的な條件の分析がされていない。そのために、トールマンの動機理論は、けっきょく、高等動物にもみられる一次的欲求を根源的なものと考え、生物學主義をまぬかれない。

これに對して、次に述べるマレーの動機理論においても、欲求の歴史的、社會的な要因の分析が十分にされていない。マレーは、「欲求の包括的で一貫した、應用のきく分類」として、次のようなリストを考える。⁽¹⁾

(1) 「活動の欲求」*activity needs*。なんらかの、活動のための活動に従いたいという傾向。たとえば、美の鑑賞・創造、知的な解釋・創造などの活動では、満足が活動そのものうちに得られる。活動の欲求は、さらに二つになる。

(a) 「過程の欲求」(單なる機能の快)*process needs* (*sheer function pleasure*)。幼兒によくみられるような、無方向で無調節のジェスチュア、身體運動、發聲など、過剰な

エネルギーの表出とみなされる活動への欲求である。成人になるにつれて、このような活動よりも計画的、意識的で目標に方向づけられた行爲が、しだいにふえてくる。

(b) 「モードの欲求」 mode needs。音楽、論理の明白さ、優雅なエチケット、雄辯、肉體と運動の美など、フォームの點に満足を得る欲求である。それは、はげしい訓練の結果得られる、完成された表現ではあるが、一見、樂々と努力なしに行っているように行われることを目標とする。

(2) 「心的な欲求」 mental needs。ものに關するシンボル(イメージと語)をつくり、それらを、不斷に、結合、分解し、ことばで表現しようとする「心の欲求」 needs of the mind。

(3) 「創造の欲求」 creative needs。はっきりした既成の目標がなく、まったく新しくつくり出される目標に向かう。

(4) 「負の欲求」 negative needs。拒否、排除、回避、逃避などの欲求。

(5) 「原活動の欲求」 proactive needs。おそらく、なんらかの内部的な變化からおこる、自發的な運動への欲

求。たとえば、誘因がなくても身體運動、食物、知識などへの欲求が自發的におこることがある。「反應の欲求」 reactive needs。豫期したり、望んだりしていない、從つて不満をもたらずような状況への反應として、ある活動をおこそうとする欲求。「原活動的反應の欲求」 proactive needs。ふつうは反應的で負の欲求でありながら、特定の機會には、内部から、不安を誘發する外部状況(恥じ、危険)のイメージによっておこされる欲求。「反應的原活動の欲求」 reproactive needs。ふつうは原活動の欲求でありながら、特定の機會には、内部からでなく、豫期しない状況(食物を見ること、突然舊友が目の前にあらわれるとき)によっておこされる欲求。

(6) 「一般性」 generality と特定性 specificity。「不特定」 diffuse な欲求と集中的 focal な欲求。一般的な傾向としての欲求は、「集中化」 focalization あるいは「分流」 canalization によって、特定の對象と結びつく。

マレーは、右のように、欲求を、いろいろな角度から分類しているが、それを發生史的に跡づけることはしていない。たゞ、欲求の生得性については、次のような見解を述べている。⁽²⁾

今日、すべての心理學者は、ある種の欲求(たとえば臓器因の欲求)が、遺傳することを認めている。しかし、他の欲求については、疑問がある。欲求を分類する唯一の規準は、その「普遍性」universalityである。傾向の基(本リストは、生得的であることが證明されているかどうかにかかわらず、ほとんどすべての文化で、ほとんどすべての人にみられるような傾向にかぎるべきである。

このように、マレーでは、欲求の基本リストを、文化人類學で試みられている、比較文化の研究にまかせて、欲求を、一定の社會心理的な條件の下で發生史的にみることをしていないのである。

右のようなツールマン、マレーの生物學主義をぬけきれない動機理論を支柱とする『一般理論』の動機理論では、前述のように、「欲求」needと「欲求傾向」need dispositionが區別され、それが、ツールマンやマレーのいう生理的一次的欲求と、二次的な欲求との區別に、ほぼ照應するともいえる。

欲求傾向は、一方で、生體の要求を充たし、完結の状態に達しようとする傾向であり、また、他方、そのような状態に達するための素質をも意味する。それは、「動

因」dispos.とちがって、生得的でなく、學習されたものであり、また即時の満足だけではなく、未來に目を向けて位置づけ、撰擇しようとする傾向である。そうして、行為の理論では、次の三つのタイプが重要な欲求傾向としてあげられる。⁽³⁾

- (1) 社會的對象(他人)への態度と關係についての欲求傾向(個人と個人の關係を媒介する欲求傾向)
- (2) 文化的標準に従おうとする欲求傾向(内面化された社會價值)
- (3) 役割期待。

右の三つの欲求傾向は、それぞれ(1)パーソナリティーとパーソナリティーの關係、(2)パーソナリティーと文化の關係、(3)パーソナリティーと社會體系の關係に對應する。

(1) 社會的對象(他人)についての欲求傾向は、尊敬、愛、承認、反應の欲求傾向など。

(2) 文化的標準の欲求。文化體系の機能に缺くことのできない前提條件を實現しようとする「欲求」need。および、カセクトした關係をつくり出すために、對象をならからの仕方できちあつかおうとする「傾向」disposi-

tions。

(3) 役割期待。他我から「適切な」proper 反應と態度とを得ようとする「欲求」、および他我に對して、適宜の態度と反應を與えようとする「傾向」。

右のような分類では、パーソナリティー内部における欲求傾向の機能分化はしめされるが、社會生活のなかで欲求の發生史的な系譜がしめる位置は、まだあきらかにされない。この點は、『一般理論』以後、パーソンズを中心にするグループが展開した行爲理論において、くわしく検討されている。

『一般理論』以後における動機づけの理論

パーソンズは、『一般理論』の二年後(一九五三年)に刊行された『行爲理論にかんする作業論文集』(ペールズ、シルズとの共著、以下『作業論文』と略す)中の第五論文、『動機づけ、シンボル形成、および役割構造』で、動機づけに關する、いっそう精密な考察を發表している。

この論文でパーソンズらは、まず「動機づけの一般的な考察」という項目で、次のように述べる。「行爲理論の目的のためには、動機づけを、《本源的に》originality 未

分化なものとしてあつかうのが最もよい」のであり、「動機づけは、一つの均一な《満足への衝動》urge to gratification、動機づけからくる緊張状態を緩和するため、《何かを得ようとする》set something 衝動にほかならない」つまり動機づけは、生理的體系としての生體から出てくる「エネルギーの流れ」flow of energy とみなされる。このエネルギーの流れは、行爲の體系としてのパーソナリティーによって組織され、分配され、利用されるのである。

このように、動機づけを、本源的に、未分化なエネルギーとみる考え方は、人間の(あるいは動物をもふくめて)分化した欲求の統合である欲求體系を、發生的にさかのぼって、単一な基本欲求あるいは源欲求のエネルギーに歸する、欲求エネルギーの一元論である。欲求エネルギーの一元論は、すでに、フロイトが、初期の精神分析理論で、「リビドー」libido という本源的な心的エネルギーの概念をつくつたのに相通じるところがある。

右にあげた、欲求エネルギーを未分化な本源的動機づけとする考え方は、精神分析とは全く別な地點に立つ新行動主義の理論にもみられる。たとえば、ハルは、その

『行動の諸原理』で次のように、述べている。⁽⁷⁾

「内分泌の化学物質は、特定の『效果器』effectorの反應閾を低下させるだけではない。すべての效果器の行動を容易にする、一般化された、しかし、おそらくより弱い傾向をもち、フロイトのリビドーに類比される、ある程度の、未分化な動機づけになる。このように、性ホルモンは、實際の性行動にふくまれる行為とは、はるかにかけ離れた、どんな習慣に基づく行為をも動機づける傾向をもつだろう。」

ハルのばあいには、パーソンズのように、「本源的には」未分化な動機づけというのではなく、個々の欲求をおこさせる、「動因刺激」drive stimulusとなる化学物質を考えるのであり、その物質を「動因物質」drive substanceとよんでいる。この動因物質をふくむ血液が、習慣の解剖學的な土臺である神経組織に達すると、その興奮傳導度が高められるようになる。ここでは習慣という行動の單位が、動因によって賦活されること、が、神経生理學的に想定されている。

もっとも、ハルは、「一般に、動因は未分化の性格をもっているが、……それは、決して、どれか一つの動

因、たとえば性の動因が、特に他の諸動因を支配するということではない」として、フロイトのリビドー説との區別を強調している。⁽⁸⁾

パーソンズとベールズは、この本源的に未分化なエネルギーとしての動機づけの考え方を、さらに、『作業論文集』の後に發表された『家族』(前出)のなかで、次のように展開した。⁽⁹⁾

まず、『動機』motiveあるいは動機づけは、行動の構造に特に關係するかどうかに関係なく、動機づけのエネルギーの一般的な概念として用いることもあれば、あるいは、動機づけのエネルギーを『付與された』invested特定の構造を指すこともある。「そうして、「欲求傾向は、特定の構造上の要素を指し、そのばあいには、動機づけのエネルギーは、ある種の認知的な対象カテゴリー・ーションによって、ある程度、組織化されている。」

この「動機づけの體系の構造」structure of the motivational systemは、行為體系自體の分化過程が發達した結果であり、動機づけの付與の諸タイプは、パーソナリティの分化過程から生れてくる。⁽¹⁰⁾そうして、パーソンズとベールズは、動機づけの發生史を、パーソナリティ

1の發達過程に即して考えていこうとする。

まず、パーソナリティーの最も原初的な段階で、幼児の行爲體系においては、「生體的な欲求」organic needsだけがその單位である⁽¹¹⁾。このように、全く生物学的な諸欲求の束として、原初的な行爲體系を想定した上で、そこから、「社會化」socializationの過程として、動機づけの分化した體系が生れてくることを考えるばあい、パーソンズとベールズは、行動心理學と精神分析理論を結びつけようとする。

そこで動機づけの生物学的な土臺とパーソナリティーの關係は、次のように説明されている⁽¹²⁾。

「社會化の過程の最初の位相 phase は、生體的な動機づけの諸成分、あるいは、《原初的な諸動因》primary drivesの組織を生む。この組織は、一つの體系として機能することができる。これは、《條件づけ》conditioningの過程を通じておこる。しかし、われわれは、大多數の行動心理學者 behavior psychologists たちとちがって、どれか一つの特定の動因 drive に何がおこるかという点とはなく、條件づけられた多數の動因から成る組織による全體系の本質に注目する。」

この生體的な動機づけというのは、動機の生物学的な起源のことを指すのであり、その考え方は、フロイト流の精神分析學にみられる、生物学的な動機の理論に直結している。そのことは、右の引用につづく、次のことばにあきらかである。

「この體系(原初的な諸動因の組織=譯者)は、學習された、體質的ではない、《單一》singleの新しい《體系目標》system goalを獲得したと考えられる……その第一歩は、《口腔満足》oral gratificationを最大にしようという目標である。同時に、この《萌芽的な》rudimentaryパーソナリティーは、行爲理論における一つの體系なのであり、その目標追及の過程で、統合の要求に迫られる。この時から、分化の過程がはじまるのである。」

ここでは、フロイトの精神發達理論で最初の時期とされる「口腔期」oral phaseの考えがとり入れられている。

このフロイト的な考え方は、『家族』に、かなり廣汎にとりいれられているのであり、パーソンズらは、「口腔依存」oral dependencyの時期を、幼児の社會化の、最初の段階とみるのである。この点については、また、の

ちにふれる。

ここで、注意すべきことは、パーソンズとベールズが、社會化の過程における条件づけの役割を述べながら、「行動心理學者」との立場の相違を強調している點である。前出の引用で、「大多數の行動心理學者たちが」が「どれか一つの特定の動因に何がおこるか」に注目するといったのも、おそらく、ハルやトールマンが、動物の条件づけに、食欲などの単一な動因をもっぱら使っていることを指すものであろう。だからといって、パーソンズとベールズが条件づけを次のように述べるとき、別に、新しい考え方を提出しているわけではない。⁽¹³⁾

社會化の初期におこる學習過程において、最初の重要な段階に条件づけがおこなわれる。それは、環境の刺激が、単に「解除の引き金」trigger releaseとして作用し、體質的にそなわったメカニズムを賦活するばかりから、「動機—状況の一對」 *motive-situation pair* に特有な諸反應の發達への移行に關係する。つまり、刺激状況の構造が、行動の組織にとって有意味 significant になる。これが、条件づけである。条件づけは、パーソナリティーのより高次の組織化においても、つづいておこると考え

られる。なお、『作業論文集』の第五論文では、この条件づけを、心理學の条件づけ理論に沿って、よりくわしく次のように展開している。⁽¹⁴⁾

あるレベルでは「完結的な満足」 *consummatory gratification* が、あらゆる學習の動機づけとなる。學習とは、一次的な目標對象」と連結した「 *associated with* 對象も、また、ある程度カセクトされるようになることである。この連結は、それが持っている「意味」 *meaning* によって、次の二つの方向のいずれかをえらんで限定されてくる。第一には、賞を與える對象か、あるいは、それを利用する自我の、いずれかの、特定の目標關心と「實行」 *performance* との關係で、撰擇される。このような撰擇の過程においてのみ、以前には關心をひかなかつた、新しい對象へのカセクシスが強化される。これが、刺激—反應の學習理論でいわれる「手段的條件づけ」 *instrumental conditioning* である。カセクシスの「汎化」 *generalization* の第二の方向は、一次的な満足の經驗から、自我との關係で規定されるひとつの體系の中の一次的な對象と共屬する新しい對象の撰擇へとみちびく。このばあいには、目標對象と内在的に無關係なものが、そ

の對象の「代理となる」stand for、つまり、條件づけられる。これは、「古典的條件づけ」classical conditioningである。

右のような條件づけ理論の行爲理論への適用は、ヒルガードとマークスによる、バゾロフ的・古典的條件づけと、個體の自發的行動の參與する手段的條件づけの區別を、そのまま借りたもので、別に新味はない。

むしろ、行爲理論で展開された動機づけ問題の特色は、パーソナリティーの形成について、右のような行動理論と、精神分析理論を結びつけながら考えていく仕方にある。それは、アメリカ心理學の二つの大きな流れを、合流させる試みとして、注目される。

パーソズとベールズは、動機づけの個體發生史を貫くものとして、欲求傾向の「系圖」genealogyを考へて⁽¹⁶⁾いる。前述のように、欲求傾向は、「二分裂」binary divisionの過程をとって分化するとされるが、分化の各段階における個々の欲求傾向は、一本の「系統樹」generalogical treeに配置され、すべての枝は、「生體的な欲求」organic needsを「根」rootsとする「口腔依存」oral dependencyの「幹」trunkに歸つて行く。この分裂に

は、三つの面がみられる。

(1) いったん分裂がおこると、それは不可逆的であり、欲求傾向の「分枝」は決して交叉しない。ここに、特殊化の方向がとられ、質の上での分化がおこる。

(2) 動機づけの單位あるいは諸單位の體系のあいだに、相對的な強さの順位がきまってくる。これは、分化過程の重大な各段階ごとに確立される構成要素間のバランスから生れる。たとえば、二單位段階では、「依存」dependencyと「自律」autonomyの二要素のあいだにみられる相對的な強さである。

(3) 右のような二つの面を結びつけると、成熟したパーソナリティー體系における動機づけの複合體を、パーソナリティー構造全體のなかに「定位」locatingできる。

(4) 動機づけの諸構成要素は、交錯したかたちで、役割期待の諸下位體系のなかに結合される。

ここで、「一般理論」にはみられなかった、欲求傾向の個體發生史がスケッチされているが、それは、さらに、口腔依存期を出発点とする社會化の過程を、行爲理論の基本概念の枠のなかでたどりながら、具體的に説明される。それには、まず、そこで用いられる基本概念のいく

つかをあきらかにしておく必要がある。第一に、「位相パターン」phase pattern の概念がある。これは、ある「體系」system を規定するときに用いられる概念であり、パーソナリティは、それを、パーソナリティ體系にも、社會體系にもあてはめることで、一貫した體系理論をうち立てようとするのである。⁽¹⁷⁾

位相パターンの概念は、ベールズが小集團行動の分析をおこなった際に得られた、理論的歸結に發している。⁽¹⁷⁾ ベールズは、小集團を、ひとつの機能する社會體系とみなし、その四つの「機能上の問題」functional problems⁽¹⁸⁾ を考えた。

- (1) 外部の條件に對する「適應」adaptation
- (2) 目標に向けられた作業の實行中、狀況の各部分に加えられる「手段的」な instrumental コントロール
- (3) 集團メンバーの感情、緊張の處理と、その「表現」expression
- (4) 連帶的な共同體として、メンバー同志の社會的な「統合」integration の保持。

この四つの「機能」は、さらに「パーソナリティとシルズ」の提案した「パターン變數」pattern variables の概念と

結びついて、體系理論の骨格となった。パターン變數とは、「行為者にとって、ある狀況の意味が決定しており、従つてその狀況に對して行為できる以前に、彼が選擇しなければならぬ二者擇一 dichotomy である」⁽¹⁹⁾

パーソナリティについては、その基本的なパターン變數としての欲求傾向を考えると、次のような、最も原初的な二者擇一がみられる。⁽²⁰⁾

- (1) 「感情性」affectivity。欲求の直接の解除、満足内部から禁止できないばあひ。——「感情中立性」affective neutrality。欲求の即時満足を禁止できるばあひ。
- (2) 「特定性」specificity。欲求對象の意義が特定なばあひ。——「不特定性」diffuseness。對象の意義が不特定なばあひ。
- (3) 「普遍主義」universalism。對象の意義が、一つの一般的なカテゴリーの中のメンバーシップに依存し、その一般的な規準にかなう對象は、いずれもカセクシスと評價の對象になり得るばあひ。——「個別主義」particularism。對象の意義が、自我とのある特定な關係に依存するばあひ。
- (4) 「アスクリプション」ascription。自我が、自分自

(47) パーソナル社会学の心理学的基礎 (II)

身を社会対象として関係づけ、「自己像」self-imageをつくらうとする欲求傾向のうち、自分のパーソナリティーに現在そなわっている特質を強調するばあい。——「アチーブメント」achievement。過去の、あるいは潜在する、アチーブメントを強調するばあい。(この一對は、のちに、「質」quality——「實行」performanceという名稱にかえられた⁽²¹⁾)。

(5) 「自我への位置づけ」self-orientation。自我自體の欲求傾向を満足させることだけに集中するばあい。——「集合體への位置づけ」collectivity-orientation。自我が、他我の欲求満足をはかろうとする。自我と他我のあいだに同一化がおこり、両者が集合體をつくるばあい。右のようなパターン變數のうち、パーソナリティーにとって特に重要とされる、感情性——感情中立性、および、特定性——不特定性の變數をとって、欲求傾向の四つの主なタイプをつくと、下表のようになる⁽²²⁾。

「位相」phase は、體系の變動する状態であり、一つの次元におけるその運動が、他の三つの次元における運動にくらべて最大になるときを指す。位相は、テクニカルには、四つの次元のおおのについておこる運動の特

欲求傾向の價值構成要素

	感情性	感情中立性
特定性	<p>I 部分的な満足</p> <p>受容のおよび(あるいは)反應的な社会対象を見出しその対象について受容的になろうとする欲求傾向。直接の満足と特定の質を指定する以外責任を負わない。</p>	<p>II 承認</p> <p>特定のタイプの質あるいは實行を支配する價值基準に關して社会対象との關係で承認とその交換を求めめる欲求傾向。特定の文脈以外に責任を負わない。</p>
不特定性	<p>III 愛情</p> <p>不特定の愛の相互的な態度で特徴づけられる社会対象との關係を求めめる欲求傾向。特定の満足、特定の質の指定の個別的內容にかかわらない。</p>	<p>IV 尊敬</p> <p>不特定の仕方で社会対象との關係において尊敬を受け、またその態度を交換しようとする欲求傾向。特定の質あるいは實行の個別的內容にかかわらない。しかし全體としての個人が尊敬の対象になるための基準は考慮に入れる。</p>

定な方向と量で記述されるが、便宜上、最大の運動がおこっている次元に即して命名するのである。⁽²³⁾

四つの位相の内容は、次のとおりである。⁽²⁴⁾

位相A。適應的—手段的活動(最大の適應と結びつく)。

普遍主義と實行を特徴とする、対象への位置づけ。特定性と感情中立性を特徴とする態度。

位相G。表現的—手段的活動。最大の體系統合。實行と個別主義を特徴とする、対象への位置づけ。特定性と感情性を特徴とする態度。

位相I。統合的—表現的活動。最大の體系統合。個別主義と質を特徴とする、対象への位置づけ。不特定性と感情性を特徴とする態度。

位相L。シンボリック—表現的な活動。最大の潜在性の位相。質と普遍主義を特徴とする、対象への位置づけ。不特定性と感情中立性を特徴とする態度。

つきに、そのおのおのについてみよう。

位相A。「適應」Adaptation。これは(a)變えることのできない「現實の要求」に體系を適應させるか、(b)體系外の状況を、積極的に變える(支配する)かであり、いずれのばあいにも、認知的な位置づけが必要である。対象

を、他の諸対象の普遍的な類のなかに位置づけるために、普遍主義的になる。もし、状況を支配しなければならぬとしたら、普遍主義的に規定された諸特性は、一定の目標關心に關係する、特定の文脈の中であつかわれねばならない。従って、態度は、關心の特定性を特徴とする。また、社會的な相互行為の對象となる他の行為者たちは、彼らが、どのように實行するか、また實行できるか、實行するだろうかということで見られている。対象への位置づけは、實行である。最後に、対象を、リアリティにあつかうばあいには、感情を中立に保つために、ある程度の禁止あるいは感情中立性が必要になる。

位相G。「目標の満足」Goal gratification。あるいは「目標状態の享受」Enjoyment of goal state。この位相では、対象についての關心は、特定のであり、対象は、欲求の満足に向けて何をするかということで見られており、實行が特徴になる。しかし、目標満足の活動は、感情性で満たされる。対象との關係は、個別主義に變る。というのは、対象が、目標対象になり、自我との特定な關係が重大になるからである。

位相I。「統合」Integration。対象への態度は、感情性をふくみ、対象との関係は、個別主義的である。體系の統合は、體系メンバーへの、一般化した、永續する感情的な親密さと、メンバーの間にだけ通用する、個別的な対象との関係をふくむ。しかし、対象は、その不特定の、全體的な質において見られがちである。対象としての他人は、一人の體系メンバーとしての、不特定の質においてとらえられる。従って、態度は、不特定性。対象について重大なのは、その質である。

位相II。「潜在」Latency。相互行為の休止期間には、動機づけと文化のパターンを維持することが必要である。対象に關して重大なのは、それが適當に操縱 manipulateされたとき何をするか、できるかではなく、そのもたらす連想を通じて、行為者の情動 emotion に何をするかということである。だから対象への位置づけは、主として、その質にかかわっている。また、この位相にふくまれる多くの關心は、不特定の性格をもっている。しかし、メンバーの内面的な活動は、自由に表出される感情ではなく、感情中立性を特徴とする。この位相IIは、パターンのきまった「禁止的な動機づけのポテンシ

ヤル」inhibitional motivational potential の潜在的な貯水池であり、行為に際して利用される緊張の源泉である。この中立性は、「安全辯」としての緊張解除の活動によって、感情性に移行することができる。しかし、そのばあいにも、表現的な行為の機能は、しばしば、潜在的なパターンに同調するように、エネルギーを保存調節することにほかならない。また、対象への位置づけは、普遍主義的である。というのは、対象の意味が内面化され、シンボルと意味の全「布置」constellation が、相互に關係する、一般化されたシンボル構造になるからである。

ここで問題になるのは、この四つの位相における動機づけの内容である。それは、『家族』に展開された、パーソナリティーの形成過程をたどることによってあきらかになる。これを、パーソナルは、『家族構造とこどもの社会化』という章で、まとめて²⁵⁾いる。

パーソナルは、前述の、ベールズによる集團の「作業實行」task performance における基本的位相を、こどもの社会化における基本的位相と對比させて、次のように²⁶⁾考えている。

ペールズの作業實行では、發達段階として「適應的—手段的」(A)、「目標滿足的あるいは完結的 goal-gratification or consummatory」(G)、「統合的」(I)、「どうも三つの位相があり、また、作業のあいだにはさまる休止時間に、おこる、集團成員の状態として「潜在」latency (L)の期間がある。

この四つの基本的位相A、G、I、Lを、社會化の發達段階と對比させると、下表のようになる。

下表にみられるようなかたちで、ペールズは、基本的位相A G I Lに對比させ、比較的安定した、「成熟」maturity、「潜伏期」latency、「愛情定着」love attachment、「口腔依存の四位相と、位相間の移行期に當る、「口腔危機」oral crisis、「肛門位相」anal phase、「オエディプス位相」oedipal phaseを區別した。社會化の過程は、フロイトの發見したとおり、不連続性をしめす。それは、以下にみるように各位相が、一つの體系としてのパーソナリティの構造の、特定の、ひろい範圍にわたる「再組織化」re-organizationを要求するからである。²⁷⁾

新生児が、「純粹な生體」pure organismから、口腔依存の確立に至る移行期は、はじめて新しい行動パターン

A	適應的手段的 Adaptive-Instrumental ↓ 成熟 Maturity 〔性器期〕 Genitality	目標満足 Goal-gratification ↓ 潜伏期 Latency 〔家族役割體系〕 Family role systems	G
口腔危機 Oral crisis	潜在的 Latent ↓ 口腔依存 Oral dependency 〔母—子の同一化〕 Mother-child identity	統合的 Integrative ↓ 愛情定着 Love attachment 〔親—自我の對象分化〕 Parent-self object differentiation	オエディ プス位相 Oedipal phase
L			I
	肛門位相 Anal phase		

を學習する必要に迫られる口腔危機の時期である幼児の口腔依存期では、母親を「原型」prototypeとする、一人あるいは一群の他人への愛情定着がおこり、自我の最も重要な「満足關心」gratification interests が、愛情の對象と「融合した」fused 状態となる。パーソンズでは、フロイトの「口腔期」が、「口腔攻撃」oral aggression のいちじるしい口腔危機と、比較的安定した口腔依存の状態にわけられている。

口腔依存期の安定は、肛門位相によって破られる。この位相では、肛門括約筋のコントロールを、シンボリックな原型とする、自己コントロールが要求されるようになる。この移行の位相を経て、母親との相互行為で、より自律的な役割を演ずる、「愛情依存」love-dependency の比較的安定した位相に入る。ここでは、フロイトが「一次的同一化」primary identification と區別した、最初の「對象定着」object attachment がおこり、こどもは、ただ愛されるだけではなく、積極的に愛するようになる。

次に、オエディプス危機がおこり、母親への愛情定着が攪亂され、潜伏期間に入る。そうして、母親に對して

だけではなく、父親ときょうだいに對しても、獨立した自律的な役割がとられる。潜伏期間では、「外面的なエロティシズム」overt eroticism の「抑壓」repression がおこる。しかし、こどもの一次的な安全は、家族内での彼の統合に左右され、家族の外部に、一次的な固着を得る能力を持っていない。

青年期の危機的性格は、この家族への依存を捨てさせ、家族の外に獨立した定着を形成させるような壓力が加わるところにある。フロイト主義者が、「成熟」maturity あるいは「性器期」sexuality とよぶのは、この位相の正常な結果であると考えられよう。

さらにパーソンズは、パーソナリティー發達に關するフロイト的な理論を、行為理論の體系に、あてはめて、成人のパーソナリティーにみられる欲求傾向を、次のような系圖にまとめみた。⁽²⁸⁾

(I) 幼児が、自我と集合體(自分と母親とのあいだにつくる)のバランスを保つ、単一な單位の體系である口腔依存の段階から、愛情依存の段階に移ると、依存と自律の欲求傾向が生まれる。それは、母親が幼児に與える影響あるいは「力」power の相違点からみれば、特定な欲求

の満足を求める依存(特定性)と、一般的で不特定の承認(「いい子ですね」)を得ようとする自律(不特定性)にわかれることになる⁽²⁹⁾。

II 依存と自律の各々から、また、次のような欲求傾向が分化してくる。それは、適應的・手段的な位相にみられる、感情中立性と中立性の相違に應ずる⁽³⁰⁾。

(1) 依存からは「育成」(nurturance)と「同調」(conformity)が分れてくる。育成(あるいは「親コンプレックス」parent complex)は、個別的な欲求満足を與えてやろうとする傾向(中立性)であり、同調とは、最高レベルの規範への同調を強制し確保しようとする傾向(感情性)である。

(2) 自律からは、「安全」(security) (あるいは「こども(自我)コンプレックス child [ego] complex)と「適當」(adequacy)が生れる。「安全」は、愛情と承認を受け、他人と連帯し、パーソナリティーの他の部分を受けいれる「關係的な」(relational)傾向(中立性)である。適當な、他人から豫期され、受けいれられる、特定のことをしようとする實行への傾向(感情性)である。

(3) 次に、右のような、(a)育成、(b)同調、(c)安全、(d)適當の、四つの傾向から、それぞれ、(a₁)「快」(pleasure) (母

コンプレックス) mother complex) (a₂)「鑑賞」(appreciation) (b₁)「規律」(discipline) (父コンプレックス) father complex) (b₂)「コントロール」(control) (c)「好み」(like) (姉コンプレックス) sister complex) (c₂)「受容」(acceptance) (d₁)「アチーブメント」(見コンプレックス) brother complex) (d₂)「協力」(cooperation)の八つが分化し、そのおのおのが、さらに、二つずつに分れる。それを一括してみると、次のような表になる⁽³¹⁾。

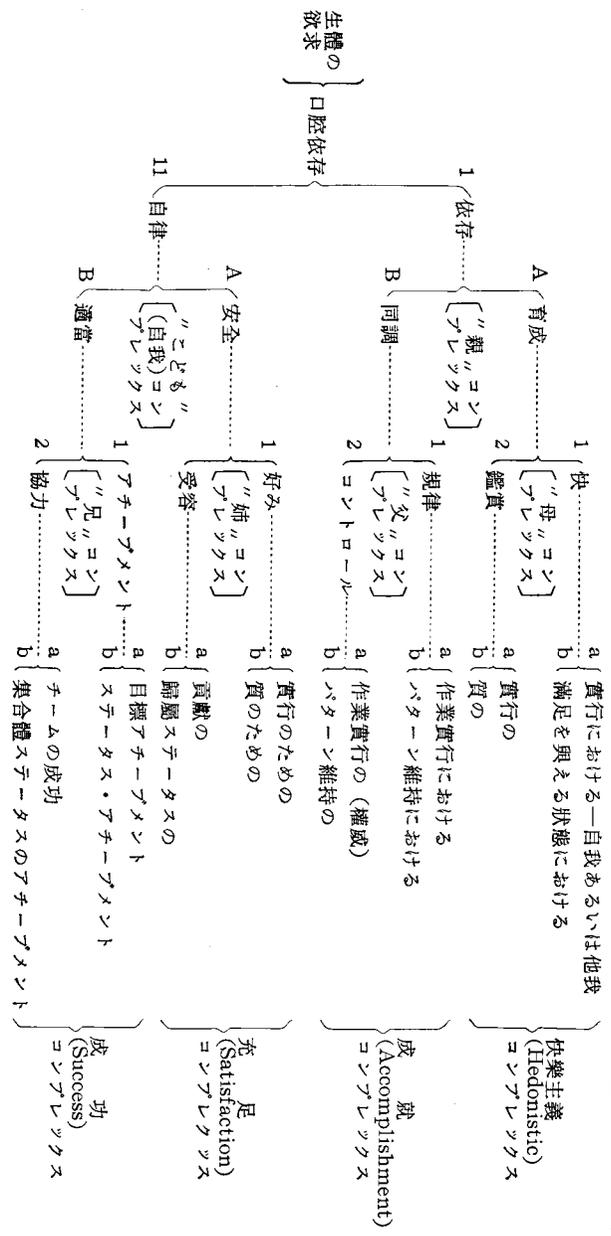
次の表は、われわれがたどってきたパーソンズ社會學の心理學的な土臺を、その最も包括的なかたちでしめしている。そこには、パーソンズの行爲理論がふくんでいる、さまざまな弱點も、集中的にあらわれている。以下、本論文の結びとして、その批判を要約しておこう。

III パーソンズにおける心理學理論への批判

パーソンズの心理學理論は、社會行爲の統一的理論を企てるのに當って、次のような設定のあやまりをおかした。

(1) 行爲理論は、「生體の行動」(behavior of the organism)ではなく、「行爲者の行爲」(action of the actor)を對象に

自我集合体	力の相違	適應的・手段的な相違	欲求傾向の築園
1 特定性	A 中立性	1 普遍主義	a 質行
11 不特定性	B 感情性	2 個別主義	b 質



すると主張する⁽³²⁾。しかし、一方、欲求傾向の系圖にもみられるように、フロイト的な「生體の欲求」から、すべての欲求傾向が派生するものとみる、生物學主義を脱していない。このことは、前出『生物學上の類推に關するノート』にある、次のことばにあきらかである。「人間のパーソナリティーと社會は、最もひろい意味で『自然の中に』あるのであって、『自然に對立して』いるのではない。」⁽³²⁾ そうして生物學と社會心理學の理論は、「共通の概念圖式を土臺とする。」⁽³²⁾ このように、パーソンズには、生物學主義をぬけきれないところがある。

(2) パーソンズは、心理學を、行爲理論のうち、パーソナリティー體系の理論と一致する領域とみなす。その心理學とは、シンボル以前の高等動物のレベルにもみられるような行動研究に發する「行動心理學」である。そうして、このような心理學は、「體系としてのパーソナリティーのなかにおこる原初的な行爲の過程とその組織」を⁽³³⁾ あつかうことができる。こうしてパーソンズは、トールマンらの行動理論と、フロイトの精神分析理論で、パーソナリティー理論を組み立てている。この二つの理論は、たしかに、動機づけの生物學的エネルギーを

設定する點で共通點があり、そこをパーソンズはとらえているのである。しかし、条件づけの理論と精神分析理論の深い共通點は、もっと別なところにあることに、パーソンズは氣づいていないようである。たとえば、条件づけにおける條件刺戟の豫報性と、精神分析理論における不安 *Angst* の豫報性⁽³⁴⁾ など。

(3) パーソンズは、パーソナリティーの研究について、右のような立場以外の心理學をかえりみようとしない。たとえば、パーソナリティーに關する、最も廣汎な實證的研究として知られる、キャッテルやアイゼンクの、因子分析法によるパーソナリティー研究⁽³⁵⁾ をとりあげないのはおかしい。だから、キャッテルからは、逆に、パーソンズのパーソナリティー理論が、「統計的裏づけを⁽³⁶⁾ 缺き」「單なる社會心理學の理論にとどまる」と批判されているのである。もちろん、パーソナリティー理論には、どうしても「統計的裏づけ」がなくてはならない、ということはない。しかし、キャッテルやアイゼンクの因子分析法にかぎらず、最近の動機づけ理論や、また精神分析の新しい傾向などは、いつまでも、行動心理學とフロイト理論だけに頼るパーソンズのパーソナリティー

理論を、古めかしいものにしてはいることは否定できない。

(4) パーソンズは、パーソナリティー理論を、行動心理學と同一視するから、社會心理學を、心理學と社會學を媒介する中間領域とも考へる。それは、「社會體系の構造と特定の關係をもち、かつ、相互依存の關係にある、動機づけの諸過程とパーソナリティー」をあつかう領域である。それは、従つて、社會學や心理學のように、「獨立した理論的意義の次元を持つてはならない。」³⁷⁾ここでパーソンズが「社會心理學」を持ち出すのは、心理學の先入觀念を社會現象にあてはめようとする、社會心理學のおちいりやすい心理學主義を警戒しているからである。それはうなづけるが、心理學を社會心理學と行動心理學に分裂させ、後者を正統の「心理學」とみるのは無理な見方である。やはり、心理學は、パーソナリティーの生理的な側面と社會的な側面の相互交流をあつかう科學として規定するのが、妥當であろう。しかし、パーソンズのパーソナリティー理論では、生理的あるいは生物学的な側面が強調され、社會的な側面との交流は、十分考へられていない。そこから、心理學を、生理學的な行動心理學と精神分析理論に代表させ、一方、社會學で、

社會體系理論をあつかうのだから、中間領域としての社會心理學は、どうしても二次的な意味しかもたなくなる。パーソンズは、「生體の行動」ではなく、「行爲者の行爲」を、パーソナリティー體系の出発点とすることを宣言しながら、「行爲」のふくむ生理—心理—社會的な要因の相互依存關係を、生理心理學、社會心理學、社會學を綜合した行動(行爲をふくむ)理論の土臺の上に立てようとしなかった。それは、パーソンズの生物學主義と裏表一體になっている彼の社會學主義のためである。

(5) パーソンズの社會學主義は、ベールズによる小集團の「相互行爲分析」interaction process analysisという、實驗集團の機能と構造の理論をモデルとし、それを、無限にパーソナリティーと社會全體にまで延長擴大しようとすることに發している。それは、バターののような概念圖式で、パーソナリティーと社會のレベルを一貫して強引に割り切ろうとする企てとなつてあらわれる。パーソナリティーの發達段階を、バターンで、一々整理して行こうとすれば、いきおい、圖式化された、機械的な段階論におちいらざるを得ない。そこでは、生理心理學、社會心理學の概念で處理すべき現象が、すべて行爲理論

の「社會學的」な概念で押し切られ、けっきょく、不明確な表現しか得られない。パーソンズ理論が難解だといわれる、ひとつの理由は、このように、社會學主義からくる、そのあいまいさにあるといつてよい。

(6) しかしパーソンズの行爲理論は、従来の社會學にも、社會心理學にもみられなかつた規模で、行動の一般理論を立てようとした試みとして、その未完成的な點や、強引な點はさておき、社會諸科學の総合的な位置づけに就いて、見逃すことはできない。そうして、近著『經濟と社會』にもうかがわれるように、パーソンズ理論が、『よいよ全體社會の諸過程の分析にも向つてくるとすれば、なおさら、パーソナリティー理論のは、全理論體系の發展にますます大きな障得になつてくるのではないだろうか。

- (1) Toward a General Theory of Action, pp. 444—448
- (2) *ibid.*, p. 455
- (3) *ibid.*, pp. 115—116
- (4) T. Parsons, R. F. Bales and E. A. Shils, Working Papers in the Theory of Action (1953). Chapt. 5. Phase movement in relation to motivation, symbol formation, and role structure.

- (5) *ibid.*, pp. 208—9
- (6) 著者『Freud, Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, 1905
- (7) Principles of Behavior, p. 252
- (8) *ibid.*, p. 241
- (9) Family, p. 190. note 2.
- (10) *ibid.*, p. 109
- (11) *ibid.*, p. 72
- (12) *ibid.*, p. 386
- (13) *ibid.*, p. 193
- (14) Working Papers, Chapt. 5, pp. 225—226
- (15) E. R. Hilgard and D. G. Marquis, Conditioning and Learning, 1940, pp. 26—74
- (16) Family, pp. 146—157
- (17) R. F. Bales, Interaction Process Analysis, 1950
- (18) Working Papers, p. 64
- (19) Toward a General Theory of Action. Part II. Values, Motives and Systems of Action, Chapt. I, pp. 76—91
- (20) *ibid.*, Chapt. II, pp. 117—118
- (21) Working Papers, p. 66
- (22) Toward a General Theory of Action, pp. 249
- (23) Working Papers, p. 181
- (24) *ibid.*, pp. 180—181
- (25) Family, Chapt. II, Family structure and social-

- zation of the child, (by T. Parsons) pp. 35—131
(26) *ibid.*, pp. 38—41
(27) *ibid.*, pp. 62—160
(28) *ibid.*, p. 69
(29) *ibid.*, pp. 83—86
(30) *ibid.*, p. 149
(31) The Social System, p. 543
(32) Family, p. 399
(33) The Social System, pp. 545—547

- (34) の心理学的基礎 E. R. Hilgard, Freud
and experimental psychology. Behavioral Science,
1957, 2, No. 1, 74—79
(35) R. B. Cattell, Personality and Motiva-
tion. Structure and Measurement. 1957; H. J. Eysenck. The Structure of Human Personality. 1953
(36) R. B. Cattell, *op. cit.*, pp. 422, 535
(37) The Social System, p. 553

(一橋大学教授)